

平成21年 3月 31日現在

研究種目：基盤研究 (C)
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19592494
 研究課題名 (和文) 母乳外来における褥婦への母乳育児支援の有用性の検証
 研究課題名 (英文) Inspection of a utility of support to breastfeeding-mother in breastfeeding support clinic
 研究代表者
 葉久 真理 (HAKU MARI)
 徳島大学・大学院ヘルスバイオサイエンス研究部・教授
 研究者番号：50236444

研究成果の概要：

母乳外来の開設により、産後1か月時の母乳育児率は向上していた。これに影響を与えていた要因は退院時の母乳育児形態であった。しかし、外来受診群では、退院時に混合・人工乳であったが、1か月時母乳となった者が24名 (11.6%) おり、総数では1か月時に母乳育児が行えている者が2名増え、母乳外来での支援は効果があると言える。また、母乳外来でのケアは、母親のニーズに合致しており、母児の心身の健康支援となっていた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：母乳育児，母乳外来，ケア満足度，有用性の検証

1. 研究開始当初の背景

2010年までに達成すべき国民運動計画であるすこやか親子21では、“産後1ヵ月時点での母乳育児率を上昇させる”ことを指標にあげている。その中間年である2005年度の乳幼児栄養調査 (厚生労働省) では、生後1カ月の栄養方法は、母乳栄養は1985年49.5%，1995年46.2%，2005年42.4%と

減少傾向にあるが、母乳と人工乳の混合栄養は、1985年41.4%，1995年45.9%，2005年52.5%と増加しており、全体で母乳を与える割合は増加しているという結果であった。すこやか親子21の中間報告 (2005年) には、“9割の妊婦が望んでいる母乳育児がスムーズにスタートできるような環境整備

の促進も必要である。産後は母体の回復を促す援助や、心身両面に対応した継続的なケアや支援が受けられるような環境整備が必要である”ことが明記されており、助産師による産後の母乳外来がその役割の一旦を担うものとする。この母乳外来では、母乳育児を支援するケアとして、乳房ケアを行いながら母親の母乳不足感を払拭し、育児にギブアップしそうな気持ちを支えるケアが行われている。母乳外来でのケアが、母乳育児を願う母親と児にとって有益であることが検証されれば、出産を取り扱う病院や診療所においても母乳外来の開設がすすみ、多くの母親が、出産した施設で有効なケアを受けられることになると考える。母乳外来における母親への母乳育児支援の有用性を検証した研究はない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、母乳外来における母親への母乳育児支援の有用性を検証することである。

3. 研究の方法

方法

1) 母乳育児率の比較

(1)産後1か月時の母乳育児率を、①母乳外来開設前後、②母乳外来受診者と未受診者で比較する。

(2)産後1か月時の母乳育児に影響を与えた要因を、ロジスティック回帰分析により算出する。

(3)母乳育児形態のパターン分析

2) 母乳外来でのケア分析

参加観察法を用いて助産師のケアの実際を観察し、解釈し、データ解釈の良否を担当助産師と確認する。

3) 受診ニーズと満足調査

受診後の母親に受診動機、ニーズの充足

感・満足感を調査

4) 母乳外来でのケアコスト分析

ケアに要した時間と費用を分析

4. 研究成果

1) 母乳外来開設前後での母乳育児形態の比較

(1)対象者背景

対象者数は586名で、平均年齢30.2±4.9と、母の出産平均年齢30.5歳（厚生労働統計2006年度）とほぼ同年齢であった。この対象を母乳外来開設前の群（n=388）（以下開設前群とする）と開設後母乳外来受診群（n=198）（以下受診群）とで、産後1か月時の母乳育児形態を比較した。母乳外来開設前と母乳外来開設後での対象者背景（育児経験の有無、出生児体重、分娩児出血量）には、違いを認めなかった。しかし、退院時の母乳育児形態を比較すると、母乳外来開設前では、退院時の母乳育児形態は、388名中、母乳育児群221名（57.0%）、混合・人工乳群は167名（43.0%）であった。これに対して母乳外来開設後は、198名中、母乳育児群159名（80.3%）、混合・人工乳群は39名（19.7%）であり、 $P=0.000$ と両群間に有意な差を認めた（表1）。

表1：退院時の母乳育児形態

退院時	開設前	開設後	合計	χ^2 P値
母乳	221	159	380	$\chi^2=31.34$ $p=0.000$
混合・人工乳	167	39	206	
合計	388	198	586	

産褥退院時の母乳育児率は、母乳外来開設前では57.0%であったが、母乳外来開設後では80.3%と高い率を示している。この背景が、産後1か月での母乳育児形態に影響を及ぼしていると考えられる。

(2)産後1か月時の母乳育児形態の比較

表2：産後1か月時の母乳育児形態

1月時	開設前	開設後	合計	χ^2 P値
母乳	173	163	336	$\chi^2 = 76.316$ $p=0.000$
混合・人工乳	215	35	250	
合計	388	198	586	

産後1か月時の母乳育児形態は、開設前群では、388名中、母乳育児群173名、混合・人工乳群は215名であった。これに対して母乳外来開設後は、198名中、母乳育児群163名、混合・人工乳群は35名であり、 $P=0.000$ と両群間に有意な差を認めた(表2)。

産後1か月での母乳育児率は、母乳外来開設前では44.6%であったが、母乳外来を受診した群では82.3%と母乳育児率が上昇していた。

2) 母乳外来受診の有無別にみた産後1か月時の母乳育児形態の比較

(1) 対象者背景

対象者数は251名で、平均年齢 30.7 ± 4.5 と、母の出産平均年齢30.5歳(厚生労働統計2006年度)とほぼ同年齢であった。この対象を母乳外来を受診した群($n=207$) (以下受診群とする)と受診しなかった群($n=44$) (以下未受診群)とで、産後1か月時の母乳育児形態を比較した。受診群と未受診群での対象者背景には、違いを認めなかった。また、受診の有無別に退院時の母乳育児形態に違いがあるか否かを検討した。受診群では、退院時の母乳育児形態は、207名中、母乳育児群167名(80.7%)、混合・人工乳群は40名(19.3%)であった。これに対して未受診群は、44名中、44名全員が母乳育児群であり、 $P=0.001$ と両群間に有意な差を認めた。

産褥退院時の母乳育児形態が母乳でないものは皆、母乳外来を受診しており、母乳

外来を受診しなかった者は皆、退院時母乳育児であった(表3)。

表3：退院時の母乳育児形態

退院時	受診群	未受診群	合計	χ^2 P値
母乳	167	44	211	$\chi^2 = 10.114$ $p=0.001$
混合・人工乳	40	0	40	
合計	207	44	251	

(2) 産後1か月時の母乳育児形態の比較

表4：産後1か月時の母乳育児形態

1月時	受診群	未受診群	合計	χ^2 P値
母乳	169	37	206	$\chi^2 = 0.148$ $p=0.701$
混合・人工乳	38	7	45	
合計	207	44	251	

母乳外来受診の有無別に退院時の母乳育児形態に違いがあるか否かを検討した。受診群では、退院時の母乳育児形態は、207名中、母乳育児群169名(81.6%)、混合・人工乳群は38名(18.4%)であった。これに対して未受診群は、44名中、母乳育児群37名(84.1%)、混合・人工乳群は7名(15.9%)であり、 $P=0.701$ と両群間に有意な差は認めなかった(表4)。

3) 母乳育児パターンからみた母乳外来の評価

退院時の母乳育児形態が、産後1か月時にどのような形態になっているのかを4つのパターンに分類し、受診群と未受診群とで比較した。

受診群では、退院時母乳であり1か月時も母乳であった者は207名中145名(70.0%)、退院時母乳—1か月時混合・人工乳の者は22名(10.6%)、退院時混合・人工乳—1か月時母乳の者は24名(11.6%)、退院時混合・人工乳—1か月時混合・人工乳の者は16名(7.8%)であった。未受診群では、退

院時母乳であり1か月時も母乳であった者は44名中37名(84.1%)、退院時母乳→1か月時混合・人工乳の者は7名(15.9%)であった(表5)。

表5:産後1か月時の母乳育児形態

パターン	受診群	未受診群	合計	χ^2 P値
退院時母乳→ 1か月時母乳	145	37	182	$\chi^2 = 10.365$ $p = 0.016$
母乳→混合・ 人工乳	22	7	29	
混合・人工乳→ 母乳	24	0	24	
混合・人工乳→ 混合・人工乳	16	0	16	
合計	207	44	251	

注目すべきは、受診群では、退院時混合・人工乳であったが、1か月時母乳となった者が24名(11.6%)おり、1か月時に母乳育児が行えている者が退院時の総数からみて2名増えている。一方、退院時母乳であったが、1か月時混合・人工乳となった者が、受診群で22名(10.6%)、未受診群で7名(15.9%)いること、母乳外来受診によりケアを受けても、退院時混合・人工乳であり、1か月時も混合・人工乳の者が16名(7.8%)いることである。母乳外来受診群では、退院時の母乳形態と比較すると、母乳育児群が2名増え、これに反して母乳外来を受診しなかった群では退院時母乳であっても1か月時には7名(15.9%)の者が混合・人工乳育児となっていた。

結論:母乳外来の有用性を検討した。結果、母乳外来受診群と未受診群での母乳育児率には差を認めなかった。しかし、母乳育児率は、母乳外来を受診するしないに関わらず同じとは判断できず、母乳外来を受診しなかった群では退院時母乳であっても1か月時には7名(15.9%)の者が混合・人工

乳育児となっていたことから、産褥退院後の母乳育児支援は必要であると言える。

4)産後1か月時の母乳育児に影響を与える要因分析

産後1か月での母乳育児形態を説明変数(混合・人工乳0,母乳1)として、独立変数に母児の要因(年齢,子育て経験,分娩時出血量500ml以上,出生児体重2500g未満,退院時母乳育児形態,母乳外来受診有無)を用いてロジスティック回帰分析により影響の大きさを分析した。

表6:産後1か月時の母乳育児形態に影響する要因の影響レベル (n=251)

	オッズ比	95%CI	p値
年齢	0.997	0.928-1.074	0.935
子育て経験	1.650	0.790-3.447	0.183
分娩時出血量 500ml以上	1.386	0.621-3.095	0.426
出生体重2500g未 満	0.808	0.236-2.764	0.734
退院時母乳育児で ある	4.236	1.882-9.536	0.000
母乳外来を受診し た	1.429	0.552-3.703	0.462

結果、各々のオッズ比は、年齢0.997、子育て経験1.650、分娩時異常出血1.386、低出生体重0.808、退院時母乳育児である4.236、母乳外来を受診した1.429であり、産後1か月時の母乳育児と有意な相関を示したものは、退院時母乳育児形態(p=0.000)のみであった(表6)。

5)母乳外来でのケア分析、受診ニーズと満足調査

母乳外来でケアを受けた母親34名とケアをした助産師34名(延べ人数)から得られたデータを分析した。

(1)母乳外来で行われたケア

助産師は、①母乳がこの児に足りているか

どうかのアセスメント, ②このまま母乳育児継続で良いかどうかのアセスメント, ③母乳育児を中心として育児全般の困り事はないかどうかのアセスメントの3つの視点からアセスメントをし, ケアを行っていた。

(2)母親の受診動機と満足であると感じたケア

母親の受診動機は『母乳育児を希望している』者が, 『母乳で大丈夫か, 母乳が足りているか』の確認であり, 特に『赤ちゃんの体重が増えているか』ということを心配しての受診であった。

どのような点で満足と感じたのかは, 『赤ちゃんの体重が増えていることがわかった(母乳で大丈夫であることがわかった)』『これで大丈夫だと安心した』『乳房マッサージが気持ちよかった』『助産師さんにいろいろ聞けて(見てもらって)よかった』であった。母親に母乳外来でのケアが満足であったと判断させたケアは, 【母乳育児継続を支持するケア】, 【子育てを支援するケア】, 【助産師による心身両面のケア】の3つに分類できた。

6) 母乳外来でのケアコスト分析

ケアに要した時間と費用を分析した。ケアに要した時間は, 平均 54.5 ± 12 分で, 調査施設での母乳外来の費用は3,300円である。経験5年目の助産師の1時間単価(基本給から算出)は, 概算で2,000円程度であると算出される。ケアに要する他の費用を加味しても決して利益が多いとは言えない。一方, 母乳外来受診者の本費用に関する意見はまちまちで, その意見に影響する要因は, 【本人の社会経済的背景(金銭価値)】と【ケアの満足度】, 【助産師との関係性】の3つであった。

ケアコスト分析は, 今後更に満足レベルやケア効果を評価して算出する必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

1. M.Haku, Breastfeeding, -factors associated with the continuation of breastfeeding, the current situation in Japan, and recommendation for future research, The Journal of Medical Investigation, Vol54 (3,4), 224-234,2007.査読有

[学会発表] (計1件)

1. M.Haku, Development of breastfeeding prediction tool and inspection of the utility re-evaluate of breastfeeding support clinic, poster session, the International Congress of Midwives,2008. 査読有

6. 研究組織

(1)研究代表者

葉久 真理 (HAKU MARI)

徳島大学・大学院ヘルスバイオサイエンス研究部・教授

研究者番号: 50236444

(2)研究分担者

富安 俊子 (TOMIYASU TOSHIKO)

徳島大学・大学院ヘルスバイオサイエンス研究部・准教授

研究者番号: 50284812

竹林 桂子 (TAKEBAYASHI KEIKO)

徳島大学・大学院ヘルスバイオサイエンス研究部・助教

研究者番号: 20263874

(3)連携研究者